
天剣を持つ少年 第二部

康頼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天剣を持つ少年 第二部

【Nコード】

N3728Y

【作者名】

康頼

【あらすじ】

この小説は天剣を持つ少年の続編です。本当は分けるつもりはなかったのですが、向こうは全体を修正加筆しているため、こう言う措置を取らせていただきました。

第一話 高町家にて 前篇

とある日曜日。

久しぶり海鳴の大地に降り立ったレイフォンは、久しぶりの帰宅に笑みをこぼしていたはやとともに、八神家を出た。

「いやー、アースラに乗れた時は興奮してもうたけど、やっぱりこういう太陽の下のアスファルトや土の上の方が落ち着くな」

「確かにそうだね、なんか足が宙に浮いてるって感じで落ち着かなかったしね」

車椅子に乗るはやてをレイフォンはゆっくりと押しながら答える。
先の事件の取り調べで、アースラ内に缶詰状態だったため、こうして外に出るのは三日ぶりになる。

「そうなん？ レイ君はいつも通りふてぶてしそうに寝てたから、そんなん気にしてないと思っただわ」

「それは僕も同感だね。 はやてだって食堂でおかわりとかしてたから」

「むう、なんか私が食い意地を張ってるような言い方だな」

目元を細めて口をぷくりと膨らまし、不機嫌です、という表情のはやてに、レイフォンは思わず口元を緩めてしまう。

はやてのこの表情を守るためにレイフォンは剣を手を取ったような

ものだ。

それ故に、力を振るい、様々な人達にも迷惑を掛けたレイフォンだったが、結果としてはやてとこうして何でもないように話ができることが嬉しかった。

「そうかな？ でも確かにはやてよりはヴィータの方が食い意地を張ってた気がするね」

「レイ君、あとでヴィータに殴られるといいんちゃう？」

はやてのご飯の方がおいしいと、文句も言いつつもきっちりのご飯を食べ、食後のアイスまで頂いていたヴィータは、現在アースラ内で治療の最中である。

人よりも優れた回復能力を持つヴィータだったが、あの戦闘でのダメージは大きかったようで、当分安静にしておかなければならない。それは同じくベットの住人になっているシャルも同様で、今頃は付き添い兼事情聴取を受けているシグナムとザフィーラと共に暇を持て成しているだろう。

レイフォンも闇の書に吞まれたことやリインフォースのことなど話すことが色々あるが、それは後日ということになり、現在はやてと共に、とある場所へと向かっていた。

そこは、はやてに新しくできた友達の家であり、はやて自身も客として何度か足を運んだ場所でもある。

喫茶『翠屋』。

知る人ぞ知る、隠れ名店で特にシュークリームが絶品らしい。

何時だったかはやてがシュークリームを買ってきたことがあり、そのシュークリームは甘いものが得意ではないレイフォンでも美味し

く頂けるほどのモノであつた。

「ヴィータには、悪いことしたかな？」

「まあ、でもドクターストップ掛かつてるからなー」

もし、お土産を買ってくると言わなければ、ずっと機嫌の悪いままだっただろう。

だが、その一言で機嫌を直すのがヴィータらしい。

他にもヴィータ以外にも、甘いものの好きのリンディやエイミィ、シヤマルにシグナム、そしてレイフォン以上に甘いものが苦手なクロノからも頼まれるほどのものであつた。
恐るべし翠屋である。

「けど、私も楽しみやなー。 勿論シュークリームもやけど、なのはちゃんの家やからなー」

昨日は楽しみで眠れなかったと、七時間眠ったはやても笑みを浮かべたままで、その笑顔にレイフォンもなのは家に期待感を抱いていた。

だが、レイフォンは後に後悔するだろう。

あの時引き返しておけばよかった、と。

？・？・？・？

「こんにちはー」

翠屋に辿りつき店の扉を開くと、そこにはなのはによく似たエプロン姿の女性がいた。

女性は、レイフォン達のことを確認すると笑みを浮かべる。

「こんにちは、貴方達がなのはが言っていたはやてちゃんとレイフォン君？」

「はい、八神はやてって言います」

「レ、レイフォン・アルセイフです」

緊張気味に挨拶をするはやて達に、女性は同じように頭を下げる。

「なのはがお世話になっています」

「えっと……なのはちゃんのお姉さんですか？」

なのはに似ていることから血縁の者だろうと思い尋ねてみると、女性は一瞬きょとした様子でこちらを見ると嬉しそうに頬を染め

る。

「あら、お世辞がうまいのね。 お姉さんじゃなくてお母さんです」

「お母……さん……？」

その言葉にはやてとレイフォンは思わず顔を見合わせ、後ろに振り向いてこそこそと話し始める。

「お、お母さんなんや……お姉さんかと思ったわ」

「う、うん。 僕もそう思った」

なのはからは、なのは自身は末っ子で上には兄と姉がいると聞かされていた。

だが目の前の女性は、三児の子を持つ母には見えなくて、十台といっても納得できるのではないかというほど若々しさがあった。

「どうかしたの？」

「い、いえ綺麗なお母さんで羨ましいなって」

「右に同じです」

驚く二人を余所に、入口のベルにより来客が来たことに気付いたのだろうドタドタと足音を立てて現れたなのはが首を傾げる。

「どうしたの？ 二人とも」

「え、女性として羨ましいなと」

「故郷の人を思い出したよ」

まだ九才の子供とはいえ同じ女性として、三児の母とも思えない桃子の若々しさは、はやてにとって羨ましいものであったし、隣のレイフオンはグレンダンにいる女王陛下のことを思い出していた。

「えっと……とりあえず行こうか？」

そんな二人になのはは首を傾げるしかなく、とりあえずお客様であるはやて達をいつまでも立たせるわけには行かないので家の中へと向かい入れた。

カウンターで相変わらず微笑んでいる桃子に頭を下げると、レイフオンはそのままはやてを背負い、階段を上ろうとしているなのはの後を追う。

「レイフオン君って凄いね、はやてちゃんを背負って階段を上るなんて」

もし、なのはがはやてを背負うとするのなら、ほんの数秒で崩れ落ちてしまうだろう。

目の前のレイフオンは、自然体のままで、なのはの方を見て首傾げていた。

しかし、背負われていたはやては目を細めるとゆっくりと口を開く。

「……それはなのはちゃん。私が、重いつて言いたいんか？」

「ち、違うよっ！！ 私だったら軽くて可愛いはやてちゃんを背負って階段を上るなんて絶対にできないからっ！！」

はやてから感じる^{プレッシャー}圧迫感に自身の発言の拙さに気付いたのは慌てて否定すると、その様子を見ていたレイフォンが助け船を出す。

「んー、一応鍛えているからね」

剄を纏い、天剣を振るい、巨大な汚染獣を屠るレイフォンにとって九歳の少女を背負うくらい簡単な事だ。

その言葉に、戦っていた時のレイフォンのことを思い出しているのだろうか、遠い目をしたなのはが納得した様子で頷いた。

「そうなんだ。 やっぱり武術している人ってすごいんだね」

うんうんと納得しているなのはの後方でドアが開き、そこからののはの友達であるアリサが顔を少し出す。

「ちょっと、なのは。 立ち話なんてしてないで、部屋に入ってきたなさいよ。 皆待っているんだからね」

「あ、ごめんねアリサちゃん」

アリサの指摘通り、いつまでも廊下で立ち話しているのわけにもいかない。

はやてに至っては、レイフォンに背負われている状態なのだから早く降ろしてもらいたかった。

なのはに続くようにレイフォン達も部屋に入るとそこには、なのはの友達のすずかとフェイトの二人がテーブルを囲んで座っていた。テーブルの上を、ジュースの入ったグラスと喫茶店で並べていたものと同じケーキに手作りのクッキーが所狭しと並べられていた。

「すずかちゃんに、フェイトちゃん、こんにちわ」

「こんにちわ、はやて」

「うん、はやてちゃん、お久しぶり…って程じゃないよね？」

レイフォンに背負われたままの体勢で、はやては片手を上げて挨拶すると、すずかは嬉しそうに微笑みながら答えた。

「そうやね、けど私的には一年近く会ってない気がするわ。ところでフェイトちゃんなんかその格好可愛いな、人形さんみたいや」

次に目にはいったのが、すずかの隣にいたフェイトであり、その私服姿だった。

すずかとアリサと違い、私服姿のフェイトを見たことがないはやてには新鮮そのもので徐々にテンションが高まっていく。

そんなはやての視線に照れたように、そして若干顔を引き攣らせたフェイトが口を開く。

「あ、ありがとう、これリンディさんに選んでもらったの……」

「そうなん？ てつきりクロノ君に興味かと思ったわ」

怯えるフェイトに気付いたはやては、自身の理性を働かせ踏みとどまると思わず思ったことを口にする。

「黒いから？」

「正解、なのはちゃん」

なのはの言った通り、フェイトの私服はバリアジャケットと同様に黒を基調とした作りになっており、少々大人びた感じになっているが、それが一層彼女の可憐さを引き立てていた。

「あんたらくだらないこと言っでないで、さっさと座りなさいよ。あとはやて、私はまだなんだけど？」

「うん、アリサちゃんは、私の中の芸人魂が騒いだからあえてスルしてみました」

キリがないと判断したのか、強引に座らそうとするアリサに、はやてはレイフォンの背から降ろしてもらうと、そのまま下に敷かれたクッションに腰を下ろす。

「頭の中は相変わらずね。所で芸人魂って何よ？」

「うーん、もう少し勢いのある突っ込みを期待してたんやけどな」

「はいはい」

本当にどうでもよさそうにアリサは呟くと、そのままクッションに腰を下ろすと、一人立っているレイフォンにクッションを手渡した。

「ところで、貴方もさっさと座りなさいよ。たしか、レイフォン………だっただわよね？」

「え、うん。えっとアリサちゃん？」

手渡されたクッションを握りしめながら、レイフォンは恐る恐る初

対面でもあるアリサの名を口にする。

そんなレイフォンに対してアリサは眉を顰めるが、そのまま呆れたように溜め息をつく。

「アリサでいいわよ。貴方の方が年上なんだしね」

「おお、アリサちゃんがデレたっ!!」

「うっさいわよっ!!」

ニヤニヤと笑うはやてに対し、アリサは顔を真っ赤に染めて怒鳴る姿を見て、レイフォンは苦笑いをしていると、隣に誰かが座った気配を感じた。

「レイフォンさん、初めまして月村すずかです」

振りかえた先には、ピンと伸びた背筋のまま頭を下げるすずかの姿であった。

そんな彼女にレイフォンは慌てて頭を下げる。

「あつ、初めまして、レイフォン・アルセイフです。はやてから時々話を聞かせてもらってます」

アリサとは違い、すずかの名前には、レイフォンも何度が耳にしたことがある。

確か、図書館で出会った友達で、シャルとはやてが嬉しそうに話していたのを覚えている。

それにレイフォンは知らなかったが八神家にも泊りに来ていたみたいでその際にシグナムやザフィーラ達とも何度か会っていたらしい。

「そうなんですか？ 私もレイフォンさんのことははやてちゃんから聞いてますよ」

「そうなんだ……えっと僕のことは呼び捨てでいいよ」

さん付けで呼ばれるのは好きじゃないと言ってみると、すずかは「じゃ、レイフォン君でいいかな？」と言って笑い返した。そんな二人の姿に、いつの間にか蚊帳の外と化したアリサが面白くなさそうに呟く。

「なんか、私とすずかじゃ対応が違う気がするんだけど」

「それはすずかちゃんとアリサちゃんの差やね」

「はやては黙れ」

はやてとアリサの掛け合いを隣で聞いていたなのはが、片手をしっかりと上げて笑顔でレイフォンに話しかける。

「レイフォン君っ！ 私はなのはでいいよっ！」

「あ、うん……」

押しの強いなのはの言葉に、押されるようにレイフォンは承諾すると、そんな彼女に習ってか、右手側にいたフェイトも恐る恐る手を上げて話しかけてきた。

「レイフォン、私もフェイトでいいよ」

「あ、はい……」

上目遣いのフェイトの頼みを、レイフォンには断る勇気もなく承諾するしかなかった。

こうして女だらけの女子会にレイフォンは居心地悪そうに参加するのだった。

第二話 高町家にて 中編

穴があつたら入りたい。

それが今のレイフォンの切実な願いである。

「フェイトちゃんって、肌綺麗やね」

「えっ、そっそうかな？」

「うん、ほれここなんかも」

「ひゃあっ！！ あん……」

「ちょっと、はやてっ！！ フェイトは嫌がつてるじゃないのよっ
！！」

「えー、これって一般的なスキンシップちゃん？」

「んなわけあるかっ！！」

「まあまあ、アリサちゃん。これってはやてちゃんの病気みたいなものだし」

「……すずか、サラッと酷いこと言つたのね……」

「むー、そんなすずかちゃんにはセクハラ大王からのお仕置きや」

「きゃっ！ はやてちゃん、くすぐりたいよ……」

「くんかくんか……やっぱりすずかちゃんの髪っていい匂いがするわ」

「なのはっ!! 変態がいるわっ!! すぐにシャルさんにでも引き取ってもらいなさいっ!!」

「ふふふ、シャルは今は遠い空の向こうや……アリサちゃん覚悟っ!」

「うきやあっ!! って何処触って……」

「ふとももゝ柔らかいわ」

「アリサちゃんっ!!」

「馬鹿……私達に構わず逃げなさい!!」

「人の心配する暇ないよ、なのはちゃん」

「みゃあっ!!」

「ふふふ……あれ? なんかなのはちゃん力チ力チするわ」

「ひどっ!!」

スーパ―はやてタイム。

長い間抑えていた欲求が爆発したようで、親友達にセクハラをし続けるはやてに軽く後ずさりしながら、天井辺りを眺めていた。

先程まで甘いお菓子を食べながらの女の子によるお話タイムにも馴染むことができなかったレイフォンだったが、いま現在はこの空間から逃げたくなってきた。

寧ろ逃げるといふのは良い考えかもしれない。

せつかくはやてが友達と仲良く？しているのだから邪魔するのも悪いだろう。

今なら抜け出すことも簡単だろうと、レイフォンはある意味自己防衛に走るとそのままゆつくりと立ち上がり、そのまま忍び足で扉の前まで歩き、そしてノブに手を掛けた。

「レイフォン？」

どうやらそう簡単にいかないモノで、扉を開こうとしたレイフォンに、背後からフェイトの声が掛かる。

恐る恐る振り返った先には、はやてから逃れようと部屋の隅に隠れていたフェイトが助けを求める子犬のような目でこちらを見つめていた。

その眼差しに罪悪感を感じたレイフォンは、右手をドアノブから離す。

そして、そのまま部屋の真ん中でアリサに絡みついていたはやてを止めようとゆつくりと歩き出した。

「そうや、レイ君も一緒にどうや？ 男の子やからこんな興味あるだろう？」

「ごめん、トイレ行ってくるよ」

説得を二秒で諦めて、そのまま当初の予定通り逃亡を図ることにしたレイフオンは速やかに部屋の扉を開けた。

フェイトの悲鳴を聞きながら、一階に下りてきたレイフオンはとりあえずどうするか考え始める。

流石にこのまま高町家を後にするのは、薄情すぎるだろうから却下として、翠屋の方に行くのも仕事の邪魔だろう。

何より他人の家でうろつろするのは行儀が悪いし、失礼だ。

とりあえず縁側にでも出て、外の空気を吸って気分転換でもしよう、と考えたレイフオンの耳に何かが弾けたような打撃音が聞こえた。

その音に釣られるように、レイフオンは歩き始めて母屋を出ると、目の前に現れたのは道場だった。

音がこの道場から聞こえることを確認したレイフオンは、閉め切られた引き戸を開き、道場の中を覗いてみる。

そこは外の世界とは別世界のようで、静寂に包まれた道場の中心に佇む白い胴着に紺色の袴の女性。

女性の両手には二本の木刀が握られ、何かを待つように両目を閉じていた。

テレビで見た聖職者の祈りにも似た女性の姿に、思わずレイフオンも魅入られてしまう。

そして、女性は動いた。

板間の上を音を立てずに流れるような足捌きから、風を切り裂く緩急のある剣閃、

それら全てが見る者を魅了する剣舞に、レイフオンも思わず感嘆の声を上げそうになる。

故郷のグレンダンには化物のような武芸者はいるが、女性のような美しい舞芸ぶげいを行うことができる人間はそうはいないだろう。リントンスやサヴァリスはこういうことには無縁だし、唯一似合いそうなのがカナリスくらいなのだが、彼女の剣舞というものは見たことはなかった。

何よりレイフォン達は剋技という武芸である。

目の前の女性のような純粹な体術による武芸とは別物だろう。

「そこの貴方隠れてないで出てきたら？」

レイフォンの気配に気づいたのだろう、こちらに視線を送る女性にレイフォンは引き戸を開けて道場の中へと踏み出す。

「その……すみません、鍛練中にお邪魔して」

「別にいいよ。静かに見てくれたから邪魔になんてないないし、ところで君はなのはの友達？」

道場の壁に掛けてあったタオルを手に取り、汗を拭く女性の質問にレイフォンは思わず考えてしまう。

厳密にははやての友達のような気がするが、なのはの態度から推測するとレイフォンは友達になっているのだろう。

レイフォン自身それを否定する理由はないので素直に頷くことにした。

「はい。最近、友達になりました」

「そうなんだ。けど珍しいね、なのはが男の子を家に招待するな

んて」

「そうなんですか？」

「うん。私の知ってる限りじゃないと思うよ。所で君はどうしてここにいるのかな？……えっと」

首を傾げる女性の姿を見て、レイフォンは名乗っていなかったことを思い出した。

「レイフォンです。レイフォン・アルセイフ」

「私は高町美由希、なのはのお姉さんよ」

自己紹介とともに差し出された手をレイフォンは握り返すと、なのはの姉らしい女性 - 美由希は、何かに納得したように頻りに頷き始める。

「やっぱりレイフォン君って、武術……剣術とかやっているでしょ？」

「そうですけど、どうしてわかったんですか？」

「手にタコがあるからね。私もあるからそうかな？って思ったの」

そう言われて、レイフォンも美由希の手を握り返してみると、彼女の掌には剣を握るものにできる特有のタコがいくつかできていた。

「本当ですね」

「でしょ？ 私は恭ちゃん…ああ兄のことね、あとお父さんがや
てる剣術教えてもらってるんだけど、レイフォン君は誰に教えても
らってるの」

「僕は、養父とっふんに教えてもらいました」

だが、それは過去のことである。

天剣になったあの時から、レイフォンは養父デルクから教えてもら
った武芸――サイハーデン刀争術を捨てたのだ。

「そうなんだ。でも凄いな」

「えっ」

感心したように美由紀がレイフォンの頭を撫でると、レイフォンは
思わず首を傾げてしまう。

「だって、本当に小さい頃から教えてもらってたんでしょ？」

「はい、七歳くらいだったと思います」

実際にはもう少し早かったかもしれない。

七歳というのは、本格的にサイハーデン刀争術を学び始めた時の年
齢である。

それに武芸者と生まれたなら、七歳から武芸を学ぶのはおかしくな
いことだが、この世界では少しずれているようだ。

「なのはより小さい頃から……私なんてその頃何してたってっけ
？」

呆れたのか感心したのか溜め息をつく美由希に、レイフォンは苦笑いするしかなかった。

「でも、レイフォン君って剣術が好きなんだね」

「えっ」

不意を突かれたようにレイフォンは呆けたように声を上げると、美由希は何でもないように答える。

「えっ、だって普通、そんなに一生懸命にはなれないでしょう？」

あ、それともお父さんが好きなのかな？」

「…はい、そうですね。養父さんも剣術も好きです」

ほんの少し前のレイフォンなら武芸が好きとは言えなかったかもしれない。

小さい頃から必死になって修行したことも、より多くのお金を稼ぐためだった。

しかし、はやてと出会い、色々な事を知り、剣を振るって気付いた。彼女を守れた武芸を誇りに思えたし、離れて気付いた武芸を習い始めて頃の気持ち。

はじめとしてサイバーデン刀争術を使うことができないかもしれないが、それでも不器用な養父やデルクから学んだ武芸のことは大切に思っている。

レイフォンの返答に嬉しそうに微笑んでいた美由紀だったが、ふとした疑問を思い出す。

「ところで、レイフォン君はどうしてここにいるの？　なのは部屋で遊んでるんじゃないかなかったってけ？」

レイフォンに興味が惹かれ、ズレた話をしていた美由紀だったが、ふと当初の疑問を思い出す。

「その……話についていけなくて」

「……あつそつか。男の子だもんね。で、外に出たら道場から物音がしてこっちに來たって感じかな」

「はい、大体そんな感じですよ」

疲れたように溜め息をつくレイフォンの姿を見て、美由希は思わずその心境に同意してしまう。

異性だけしかいない部屋に放り込まれたのが、自分であれば五分も持たずに退室する自分の姿が想像できるからだ。

だからだろうか、不憫なレイフォンに美由希は助け舟を出すことにした。

「そつか……それなら私と一緒に練習しない？」

「えっ……でもお邪魔なんじゃ？」

「いいのいいの。いつもうるさい恭ちゃん、忍さんの所にいつてるしね」

はい、と言いながら美由希に投げ渡された木刀を受け取ると、レイフォンは諦めたように溜め息をつき木刀を構える。

「えっと、じゃあ、わかりました」

軽く息を吐き、目を瞑ってレイフォンは脳裏に先程、美由希が行った剣舞を思い描く。

レイフォンにはあそこまでできる気がなかったが、やるならアレをやってみたいと思い、足を流れるように滑らす。

身体に巡らせる剄をできるだけ最小限にして、魅せられた剣舞を模倣^ねしていく。

思考が研ぎ澄まされ、剣舞の世界に入り込んだレイフォンの姿は、先程の美由希の動きに瓜二つで、唯一の違いと言えば、彼女は二刀流で、レイフォンは木刀を片手に持っていることだった。

故に、それを見ていた美由紀への衝撃は大きかった。
嫉妬、羨望、尊敬、歓喜、様々な感情が入り乱れる内心を抑え、美由希は剣舞を終えたレイフォンに話しかけた。

「ねえ、レイフォン君って何者？」

「え、何者って言われても……」

美由希の問いかけにレイフォンは、どう答えたらいいのか分からずにいると、興奮気味に頬を染めた美由紀が詰め寄ってくる。

「だって普通その歳でそんなことはできないよ。母屋にいるのは達の気配に気付かないかもしれないけど、道場の前にいたレイフォン君に気付かないほど未熟じゃないよ」

「えっと……」

いつもの癖で殺戮に使ったのが拙かったのか、それとも美由紀の剣舞を真似たのがいけなかったのか。

武芸者という存在をリンディからしゃべることを禁じられている。

そのため、どう説明するべきかと迷うレイフォンを見て、美由希は一つの答えを出す。

「む、もしかして、なのはが言ってた魔法使って奴なの？」

ほんの昨日なのはから聞かされた魔法という存在、そしてなのは本人も魔法使いという事実を聞き、この目の前の少年も同様なのではないかと美由紀は考えたのである。
その誤解は、何も思いつかなかったレイフォンにとって都合がよかった。

「えっ、そうですね。そんな感じです」

実際は全く違うのだが、取り合えずレイフォンは美由希の勘違いに乗っかることにした、というよりもこれ以上の説明をレイフォンは思いつかなかった。

「へえ……魔法ってすごいだね。私も魔法を使えないのかな？」

「魔法は才能がないと使えませんよ……確か」

魔導師ではないレイフォンにとって、魔法知識は皆無に等しい。

それに自信はなく、誰かから聞いたことを言っているだけだったが、一般人の美由希には気付かれなかったようだ。

「そうなんだ。まあ、この年で魔法少女を名乗るのは痛すぎるか

らね。ただ空を飛んでみたかったな」

「空をですか？」

「うん、なのはが嬉しそうに話していたからね」

そう言っただけで笑う美由希の表情は、なのはそっくりでやはり姉妹なのだ。レイフォンは実感しつつ、空を飛んだ時のことを考える。

武者になった時から空は自由に飛んでいたが、あれは飛んでいたのではなく跳んでいたというのが正しい気がする。

リインフォースとの融合により、リンカーコアを得られたが、魔法の力では飛ぶことはできない。

そう考えると、レイフォンもなんだか空を飛んでみたくなった。

誰かに教えてもらうべきかとレイフォンは考えていると、目の前にいた美由紀がレイフォンの肩を叩いた。

「さて、レイフォン君、次は私と模擬戦してみない？」

「と、唐突ですね」

先程まで空の話とか、魔法の話をしていたのに、いつの間にか模擬戦の話になっている。

誰もが首を傾げる唐突さにレイフォンは思わず苦言を吐こうとするが、満面の笑みの美由希の手により遮られる。

「いや、戦いが好きとかじゃないけど、やっぱりレイフォン君みたいに強い子を見ると剣を交えてみたいとか思わない？」

「思いませんし、その発言は戦いが好きな人が言うことです」

同じような事をシグナムやサヴァリスも言っていた気がするし、常人なら絶対に言わない発言だ。

そんなレイフォンの返答に不満そうに頬を膨らませた美由紀だったが、突然笑みを浮かべてレイフォンの両肩を掴む。

その笑みは面白いことを思いついたはやての表情に酷似しており、レイフォンにとって嫌な予感しかさせない笑みだった。

「ええ〜、そうだレイフォン君が勝ったら私がなんでも言うこと聞いてあげるよ」

「興味ありません」

片目を瞑り微笑む美由希の発言をレイフォンはぱつさりと切り捨てる。

「ええ〜男の子でしょ？ あ、それともフェイトちゃんやなのはが好みとか？」

「違います」

「それとも、アリサちゃん？ すずかちゃん？ それともやっぱりはやてちゃん？」

「いいかげん黙ってくださいっ！！」

しつこくからかってくる美由希に対し、レイフォンはその口を塞ぎにかかると。

普段の美由希なら、簡単にレイフォンをいやすことができただろうが、今立っている場所が拙かった。

そこは先程まで美由希が剣を振るって汗を流していた場所であり、必然的に道場の板間には汗が落ちていた。

つまりは、からかうことに集中していた美由紀の足を滑らす原因となる。

「きゃあっ!!」

「うわっ」

足を滑らせた美由希と揉み合う形でレイフォンも倒れていく。

「いたたたっ……」

「す、すみません」

美由希の顔が鼻の先にあることに気付いたレイフォンは思わず身体をのけぞろうとするが、美由希の手や足に絡まり思うように動かせなかった。

「ううん、大丈夫だよ。それより上から」

レイフォンに覆いかぶさられる形で倒れた美由紀がレイフォンに話しかけようとした瞬間、頭上から話しかけられた。

「何をしている」

「「えっ?」」

レイフォンと美由紀は思わず見上げる形で振りかえると、そこには一人の男がいた。

高町 恭也。

高町家長男にして妹思いなお兄さんがそこにはいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3728y/>

天剣を持つ少年 第二部

2011年11月21日14時31分発行